

## 資 料

## ブロカ病院

— 「パリ歴史散策」(10) —

ジョルジュ・カン 著  
金 柿 宏 典\* 訳注

1892年6月12日、パリ市議会は、ルルシーヌの病院を今後はブロカ病院<sup>1)</sup>と命名する事を決定した... 多くの理由がこの新名称実現のために作用したのだが、その最善の理由は、「ルルシーヌ」の旧称は、その名前だけで最悪の中傷になってしまう病人を収容していたからである<sup>2)</sup>...

ブロカの歴史は奇妙な歴史である。ブロカ病院は、旧コルドリエ修道院の建物の一部を占めていた。その礼拝堂の遺跡は今日でも見られる。[原注：コルドリエ修道会は、1270年4月、シャンパーニュ伯爵<sup>3)</sup>ティボー7世により、トロワ<sup>4)</sup>近郊に設立された。修道会は、1289年にパリのフォーブール・サン・マルセル<sup>5)</sup>に進出した。皇后マルグリット・ド・プロヴァンス<sup>6)</sup>は、当時、ルルシーヌ街に彼らの修道院を創設した。彼女は院内に家を見て、死ぬ数年前にそこに隠退した(1295)。この家は「シャテル」Châtelと呼ばれた。カスティリア<sup>7)</sup>国王アルフォンソ10世の長男の未亡人で、マルグリット・ド・プロヴァンスの娘のブランシュ<sup>8)</sup>もまた、この修道院に慈善を施した人物である。彼女は修道士たちに母の家を与え、母が着工した教会を完成させている。彼女は尼になったといわれる。彼女はこの修道院の教会に埋葬された。

ジャン国王<sup>9)</sup>の投獄により惹起された混乱により、コルドリエ会はパリ市内に避難しなければならなかった。神聖同盟<sup>10)</sup>の不幸が同じような決断を再び彼らに強制した。1590年7月27日、アンリ4世の部隊がこの修道院に駐留し、略奪を行い、建物の大部分を

---

\* 福岡大学名誉教授

破壊してしまう。1652年<sup>11)</sup>、内戦が再びこの建物を放棄するよう彼らに強制したが、同年10月には戻ることができた。—— ジェロ著『パリ探案』*Recherches sur Paris*、第4巻、84頁]。1289年に皇后マルグリット・ド・プロヴァンスによって創設された修道院は、大革命により厳しく弾圧され、1796年10月15日、国有財産として売却された。しかしながら随分前からコルドリエ修道院は単なる病院ではなくなっていた。というのは、薬品と食料品の商人だったニコラ・ウエル<sup>12)</sup>が、1578年に買収した可成り広い地所を合併して、何人かの孤兒たちを使って、パリ市内や郊外の内気な貧乏人のために、彼らに適応したあらゆる薬品を準備し、無料で配給していたからである。同年1月15日、勅令がこれらの孤兒たちを、捨てられ荒廃して廃墟になったこの病院に居住させた。

ウエルの広大な地所は野菜畑が一面にあったので、薬草を栽培するのに役立った。国産のものも外国産のものも栽培された... これらの庭園は最近まで残っており、薬剤師の庭と昔と同じく呼ばれていた。

秀れたウエルの死後、国王アンリ4世は、当時「ルルシーヌ」の名を持っていた「キリスト教的慈善」を「軍務中に負傷した士官や兵士の就職斡旋に割当てた」（1597年、1600年、1604年の法令）。（図版A）

ルイ13世がこの割当を変更する。ルルシーヌには幾つかの宗教団体が次々と入っている... 大革命時代にはコルドリエ会がここに入っていた。そして —— 時代の徴候だが —— これらの修道女たちもまた叛乱状態にあったのである！ 国立古文書館に保存されている自筆の手紙によれば、ルルシーヌのコルドリエ会修道女たちは「宗務会代表」に対し、「自分たちの信頼を持っていない、コルドリエ会のドゥシェ司祭を自分たちの告悔師に強制する権利を尼僧院長が持っているのかどうか」を質問している。この答が否定的だった事をつけ加える必要がある。1790年9月22日、宗務会は、「修道女は自分たち個人の指導者を選ぶ絶対的な自由がある」、と宣言した。[原注：国立古文書館。D. XIX66, n° 389]。

同じ年の日付のある尼僧院長の別の手紙。同じ尼僧院長がパリ市長バイイに対し、「宗教団体の財産を自由にする認可を与えた国民議会の布告により破産してしまった（忠実な信徒）の名で、自分たちの収入を入手させてくれるかまたは年金の金額を定めてくれるよう」要求している。そして手紙は次のように結ばれている。「私の僧院と私が貴方様の御健康のため天に祈っている願いをお認め下さいますようお願いいたします。たとえ私たちの投票が貴方様の選挙に寄与しなかったとしても、私たちの願いと愛情は

ニュースを知った時に完全に満足させられたのでございます。貴方様のいとも賤しき、いとも従順なる僕、ド・ワランジャン、コルドリエ尼僧院長」〔原注：国立古文書館。D. XIX.66 及び 44.〕

この興味ある手紙は、パイイにより立憲議会<sup>13)</sup>の宗教委員会に送られたが、委員会はこの要請を却下する決定をした... 1791年8月26日、デュモンティエ氏が競売により修道院と「薬剤師の庭園」の所有者になった。

1797年、「上記のコルドリエ尼僧院の敷地」を貫通した道路が建物の一部を取り壊す。残りの建物は引き続き工作所、避難所、コレラにかかった孤児たちのホスピスや病院に利用された... ルルシーヌ病院は、1836年1月28日に開設された。これが現在のプロカ病院であり、私たちが最近訪問したポジ博士<sup>14)</sup>の婦人科部局は、昔の薬剤師の庭園とコルドリエ尼僧院の池の跡地の一部を占めている。(図版 B)

\*

\*\*

フランドル的<sup>15)</sup>な清潔さとほとんど陽気といってよい超モダンな病室の内や、優秀な外科医たちが世界旅行中に蒐集したあらゆる完璧な器具類を集めた手術室に、前世紀までの恐ろしい病室の最小の痕跡を見出す事は不可能である。当時は通気もなく、窓もなく、火の気もない部屋に詰め込まれた患者たちは、伝染病にかかった葡萄の房のようにバタバタ死んでいったのである。

それにまた、それほど遠くまで遡らなくても、プロカ病院のインターン達は、1900年に、日本刀を手に、パリ市内の病院の常連客である鼠の群に行った壮大な狩獵を語ってくれたのである！「40匹も獲ったんですよ」と、彼らは誇らしげに断言したのである... 有難いことに、時代は変わった！

ポジ教授は、自分の患者に囲まれながら、誰もが希望を語る事を欲していた。彼は病人を治癒させるだけで満足せず、更に慰める事を欲した。彼の情け深い心は、病院のベッドに横たわった女性たちが、他の誰よりも多く、僅かばかりの喜びや太陽や陽気さを要求する権利を持っている事を、彼に知らしていたのである。賞賛すべき外科医は、苦しい不眠の間、熱のある病人の見開いた目が、裸の壁以外のものを凝視する事を欲した... 彼の要請に応じて、画家の友人たちが、この善行に協力できる事を誇りにして、物悲しいホールを最も陽気な絵で飾ったのである... プロヴァンスの空が輝き、青い海、夢の

国のバラ色の岩山が描かれた。30人の病人がいるホールの仕切壁は、二枚の寓意的なパネルで明るくされ、しかもこのパネルは「旅へのいざない」<sup>16)</sup>を歌っているのである... 旅行！ それは回復であり、健康であり、生きる喜びであり、希望ではないか... 聖なる希望ではないか。それは伝説の最も美しい三人の妖精、慈悲、優しい同情、憐れな人への献身が人生の落伍者たちに微笑しながらさしだしているリラの花束であり、白いマーガレット、矢車菊、深紅の百合、色とりどりのケシの花束なのである。

\*  
\*\*

黒いタール紙のカバーで目隠しされた窓をもつ、この長くて狭い暗い部屋に、どのようにしたら、G.クレラン<sup>17)</sup>、ルイ・ビカール、ギヨーム・デュビュフ<sup>18)</sup>、ベルリ・デフォンテーヌらの明るい絵画で輝く壁を持つ玄関ホールを見分けられよう... (図版C)

私たちは医学映画の映写会に招待されたが、それは白いスクリーンと大きな映写機で実施され、そのレンズは恐ろしい火を吐く口のように私たちに向けられた。コマンドン博士は、無知のため唾然とした私たちの眼前に、微生物、細菌、バクテリア、スピロヘータなどの神秘の世界を展示してくれた。恐るべき様子をしたこれらの名をもつものが、これら恐ろしい極微動物の世界の最良の世界に座を占めている。機智に富んだ口調で、ポジ教授は、職業的な白衣を完璧に身にまとい、この現象を最初に明らかにしたコマンドン博士の素晴らしい業績を簡潔に要約した。博士の業績は病原体の微生物と血球の電流輸送である。(対象を40,000倍まで拡大する)ウルトラ顕微鏡のお蔭で、コマンドン博士はこれまで解決不可能のこの問題を解決したのである... (図版D)

「人間の血液は」と博士が告げると、パッとスクリーンの上に一種の銀河がうつり、その中を腸膜でできた子供の小さな風船のような透明な球が往復しているのが見えた。それらは移動し、動き、回転し、ロンドを踊っているようだった。

暗い部屋にさしこんだ太陽光線の中で輝く塵が踊っているのを御覧になった事があるでしょう？ 雌鶏の血液の後に人間の血液が続き、次に無数のトリパノゾームに侵入された鼠の血液が示された。この哀れな鼠はナガナ(?)に冒されているようにみえたが、これを目撃する以前なら、この小さな鼠の体内で、かくも多くのピブリオ菌や螺旋菌、微生物などあらゆる種類の恐怖の分子がここで追跡し合い、食べ合い、戦っている事などは想像もできなかったであろう。(図版E)

次はより重要です、血液が梅毒菌を持っている不幸な兎は、と博士は断言する、目にも感染しております... 私たちはスピロヘータ同士の壮烈な戦いを見学した。私たちの眼前を通り過ぎていくこれら全ての病原菌は、血球の間で活動している鰻やブリーフ（ヨーロッパ産の鯉）や透明な小海老、回転している球体や光を放っている塵がある夢のような風景という印象を私たちに与えた。

他の映画は、狂暴な蛭たちがレモンの切れ端の中でひしめいているのを、私たちに見せてくれた...

グレイの仕事着を着たインターンたち、男女の通勤助手たちは、これらの動物たちの名前も全部知っていた。私たちとしては、単純に考えていた。「ああ神よ、これらの素晴らしくも恐ろしい幻影をつくりだすのに役立つ文化の恐るべき培養液を持っているすべての血管が、途中で破裂し、最悪の悲惨事と最も恐ろしい災厄を撒き散らさなければよいが...」（図版 F）

講演は万雷の拍手の中で終わった。何時も変らぬ好意を示して、ポジ教授はコマンドン博士に、彼の賞賛すべき発明が治療の技術に欠く事のできない進歩をもたらした事を祝福し、同時に私たちの感謝の念を伝えたのである。この新分野は、まだほとんど未開拓で、最も力づけられる希望をもたらすようにみえた。敵も姿を見せ、既に可成りのものだが、明日、それは粉碎される事を期待しよう... いささか感動した美しい夫人たちが、心は大変乱されながらも、夢見心地で立ち去っていった。そして隣りのホールから、病人たちが自分たちの小さな白いベッドから身を起して、流行のターバン帽、カルムク風<sup>19)</sup>のトック帽、大きなゲーンズバロ<sup>20)</sup>帽、高い羽根飾りをつけた帽子が並んで歩いて行くのを見ていた。これらの帽子は、つい先刻まで、映写技師の映写装置により映っていた輝くスクリーンの上をずうずうしく踊っていたのである。

ブロカ病院  
「パリ歴史散歩」(10)  
訳 注

ジョルジュ・カン 著  
金 柿 宏 典 訳注

1) hospital Broca : 第13区のレオン・モーリス・ノルドマン街(長さ400米, 最小幅12米)の111番地にあった。此処には、1270年, トロワ市の郊外に、聖王ルイの次男でシャンパーニュ伯兼ナヴァール王ティボー7世によって創立されたコルドリエール女子修道院のバリ支部の修道院があった。バリ支部のこの修道院が設立されたのは、1289年の事である。聖王ルイの未亡人マルグリット・ド・プロヴァンスがこの修道院の隣の屋敷と土地、「ルルシーヌからグルールバルプの風車に行く道」沿いの土地、を購入して修道院を拡大し、彼女は此処で74歳で死去する(1295)。彼女の娘でカステイリア王アルフォンス10世の皇太子フェルディナンド・ド・ラセルダの妃だったブランシュ・ド・フランスも未亡人になってから此処に隠遁して1320年に歿している。またフィリップ6世の妹イザベル・ド・ヴァロワも、1383年7月28日に此処で死亡した。ルイ13世は、1632年にこの修道院の姉妹修道院の増設を許可、建物はパイエンヌ街、つづいてグルネル街に移転した。この修道院は「小コルドリエール修道院」Petites-Cordelières修道院と呼ばれた。

他方フォーブール・サン・マルセル修道院は1579年に創設されたが、宗教戦争の時、1590年7月17日、アンリ4世の軍隊に掠奪された。1790年にこの修道院は廃止され、広大な庭園に、ジュリエヌ(1805)、コルドリエール(1825)、パスカル(1827)の三本の通りが順次開通した。

この建物群は、1825年にセーヌ県知事ドベレイムにより、乞食たちを保護する救護所に使用された。やがて性病になった女性を収容するホスピスに転用されたが、1832年のコレラの大流行の年に孤児になった子供たちも受け容れている。次に皮鞣し工場やクリーニング工場に使用されていたが、1836年に再び普通の一般病院となり、1867年

には276のベッド、そのうち6ベッドは乳幼児用の病院となった。最初はルルシーヌ病院と呼ばれていたが、1892年にブロカ病院となった後、1973年に取り壊された。この病院の名になったPaul Broca（1824-1880）はすぐれた外科医で、特に脳の研究で業績をあげた。言語機能は左前頭葉にある事を発見し、また人類学協会を設立した（1859）。

2) ルルシーヌの悪評：第5区と第13区にまたがるブロカ街（長さ485米、幅4.5米から12米）に吸収されて現在はなくなったルルシーヌ街は、ムフタール街とラ・サンテ街を結んでいた通りで、此処の11番地に「総大司教病院」Hôtel-Dieu du Patriarcheがあった。この病院はパリ司教ついでアレキサンドリア総大司教になったギヨーム・ド・シャナックが、1320年に自宅の隣に建設した。この病院はそれまでパリのすべて病院から入院を拒否されたため、1496年からセピュルクル街（現在のドラゴン街、第6区にあり、長さ215米、幅6.5米から12米の通り）の納屋に閉じ込められていた病人たち、シャルル8世のイタリヤ遠征に参加し梅毒に感染した患者たちを受け容れたのである。当時は不治の悪病と恐れられ嫌悪されていた病気のイメージが、ルルシーヌ病院には刻印されたため、ルルシーヌには悪評のみがしみついてしまった。

3) comte de Champagne：フランス北西部のシャンパーニュ地方は現在のオーブ、マルヌ、オート・マルヌ、アルデンヌ、ヨンヌの5県を包含する地方で、メロヴィング朝時代は数人の公爵たちによって統治されていた。次に923年から1019年までヴェルマンドワ伯爵領となり、やがて「べてん師」le Tricheurと綽名されたプロワ伯ティボーの孫ウードに移り、プロワ家のものとなった。ウードの子のティボーの時、長男と次男の2つの家系に別れるが、長男が1125年に死亡したため、次男がプロワ、シャルトル、ブリの伯爵領と共に、1125年にシャンパーニュ伯爵領も相続する事になった。しかし1152年に、この家もプロワとシャンパーニュ及びブリの2系統に別れる。初代はアンリ1世で、その子アンリ2世はエルサレム王となり、その地で歿し（1197）、シャンパーニュ伯爵領は弟のティボー5世に移る。その子のティボー6世は相続によってナヴァール国王に即位（1234）、その子孫たち、ティボー7世、アンリ3世、ジャンヌ1世らがシャンパーニュ伯兼ナヴァール王として統治したのである。ジャンヌは持参金としてシャンパーニュ領を夫となったフランス国王フィリップ・ル・ベルにもたらした（1284）、それ以後、シャンパーニュは王領となった。

4) Troyes：シャンパーニュ地方オーブ県の県都でセヌ川に面し、ローマ時代から既にこの地方の中心都市だった。4世紀に司教座が置かれ、426年から479年まで司教

をつとめたルー司教は、451年にアッチラの軍からこの町を救った事で有名である。トロワ伯領（9世紀から12世紀）の首都になり、次にシャンパーニュ伯領の首都になっている（12世紀から14世紀）。現在の人口は約77,000人である。

5) Fanbourg-Saint-Marcel：現在のムフタール街（第5区にあり、長さ605米、幅6米の通り）の別称で、この他にもヴィエイユ・ヴィル・サン・マルセルなどとも呼ばれた。ムフタール街は、リヨン経由でイタリアに行くローマ時代からの古い街道の一部で、13世紀に、ヴィエール川で行われていた皮鞣しや皮剥ぎ作業の悪臭を指す「モフエット」*moffetes*（炭鉱や深井戸から発生する炭酸ガスの悪臭）が転化して、この町 *Mouffetard* の名になったという。しかしこの附近も悪臭を放つ工場が無い時代は、葡萄畑や牧場の広がる緑豊かな田園地帯だった。

6) Marguerite de Provence (1221-1295)：プロヴァンス伯レイモン・ベランジェ5世の娘で、1234年5月27日、ルイ9世と結婚、フランス王妃となった。聖王ルイにふさわしい美德と勇気の持主で、夫王と共に第6回十字軍に参加した。エジプトに上陸したフランス軍が、マンスーラの戦い（1250.2.8.）で大敗、ルイ9世も敵軍の捕虜になった時、彼女が先頭に立って勇敢かつ賢明に移動し、占領地ダミエットの返還と交換に、夫王をはじめ多数のフランス軍の捕虜を取り戻したのである。1270年8月25日、夫王が歿した後、約25年間を未亡人として過し、慈善事業と信仰生活のうちに歿した（1295.12.21.）。

7) Castille, スペイン語で Castilla：スペイン中部の高原地帯で、古くから旧カスティリア、新カスティリアの二地方に別れ、前者は北部のブルゴス、セゴヴィアなどの都市を持ち、後者は南部のマドリッド、トレドなどの都市を有した。旧カスティリアはレオン王国の一部だったが、10世紀に分離独立した。地方の豪族はモール人の侵入に備え、各領地に城塞 *castella* を築き、防備を怠らなかった。サンチョ3世が旧カスティリアを統一し、ナヴァールと合併、カスティリア王国を樹立（1029）、レオン王国と同盟し（1230）、モール人をスペインから駆逐していき、占領地を統合して新カスティリアを新設したのである。

アルフォンス10世（1221-1284）は賢明王 *le Sage* とも呼ばれた君主で、カスティリアとレオンの連合王国の国王となり（1254-84）、モール人を撃退しカディスを奪回した（1262）。彼は国内に居住するキリスト教徒、モール人、ユダヤ人相互の融和をはかり、平和の維持と文化の興隆を目指した。また天文学者を招集し、新しき暦の編纂に

あたらせ、また新法典の完成にも努力した。しかし息子たちの叛乱にあり、アラブ人に救援をたのむ事態となり、この事を苦悩しつつ歿した。

8) Blanche de France (1252-1320)：ルイ9世とマルグリット・ド・プロヴァンスの3女。長女の名もブランシュ(1240-43)だったが夭折している。彼女はシリアのヤッファで生れているのは、母マルグリットが夫ルイ9世の十字軍遠征に同行したからである。1269年にブルゴスでカスティリア国王アルフォンソ10世の長男フェルディナンドと結婚したが、夫は1275年に死去、僅か6年で未亡人になった。フランスに帰国、慈善活動で一生を送り、1320年7月17日、68歳でパリで歿した。

9) Jean II le Bon (1319-1364)：フィリップ6世とジャンヌ・ド・ブルゴーニュの長男、父の死後、1350年8月22日に即位、同年9月26日にランスで聖別式を挙行した。綽名のle Bonは「善良」でなく「勇敢」の意味で、一人の騎士としては立派だったが、冷静に戦況を把握し大軍を指揮する司令官としての才能は無かった。フロワサールはこのいささか暗愚な主君を、「意見を変えるのには時間がかかるし、それを改めさせるのは困難」な人物と描いている。1356年9月19日に英軍と激突したポワチエの戦いにおいて、フランス軍はクレシーの敗戦から何一つ学ばず、全く同様に愚劣な突撃を繰り返し、再びイギリス長弓部隊の餌食になってしまう。自軍のかかる拙劣な攻撃を阻止しなかったジャン2世に司令官の才能は皆無だったといわれても当然である。彼はこの戦場でイギリス軍の捕虜になり、ロンドンに連行され幽閉されてしまう。プレティニー条約締結により(1360.5.8.)、一旦釈放されて帰国するが、交換条件の一つで人質になっていた次男のルイ・ダンジューがイギリスから逃亡したため(1363)、国王として信義を守ると宣言、自ら渡英し再び捕虜になり、1364年4月8日、異郷の地で客死した。一人の騎士としては立派な行動といえよう。

10) Ligue 又は Sainte Ligue：宗教戦争当時、カトリック陣営で中心的な活動をした団体。1576年に成立したボーリュエの和約は、パリ以外での多くの都市で新教徒の信仰活動を認める寛大なものだった。これに危機感を抱いた旧教徒側がカトリックの信仰を守るため結成を呼びかけた。ピカルディー地方で始まったこの新団体はすぐに全国規模に拡大強化された。同盟の目的はカトリックの信仰を擁護する事、新教徒に同情的なアンリ3世を退位させ、同盟の指導者アンリ・ド・ギーズを新国王にする事だった。しかしこれに危機感を抱いたアンリ3世は、先手を打ってプロワで招集した三部会に出席したギーズ公を暗殺させた(1588.12.23.)。ギーズ公の弟ロレーヌ枢機卿ルイもその翌

日に暗殺されてしまう（1588.12.24.）。かくてその末弟のマイエヌ公シャルル・ド・ロレーヌ（1554-1611）が同盟の指導者に選出され、暗殺されたアンリ3世の後継者になったナヴァール王アンリ、後のアンリ4世に挑戦した。マイエヌ公はブルボン枢機卿の執行により、シャルル10世としてフランス国王たる事を宣言した。しかしアルクの戦い（1589.9.21.）、イヴリの戦い（1590.3.14.）とアンリ4世に連敗し、同盟軍の勢威は地に落ちてしまう。更にアンリ4世がカトリックに改宗する旨を宣言するに及んで、同盟の存在意義がなくなり、また内部分裂もあって解体消滅してしまう。

11) フロンドの乱をさす。ルイ13世歿後、即位したルイ14世はまだ子供だったので、この機会にかつての特権を奪回するため、高等法院や大貴族が2度にわたって起した叛乱。特に第2回の大貴族の叛乱の時は、国王はじめ宰相マザランもパリから一時避難しなければならなかった。しかし最終的にはマザランの才腕と勇将テュレンヌらの奮戦により叛乱軍のコンデ公は敗北、国王一行はパリに凱旋する事ができた。1652年10月21日のことである。

12) Nicolas Houel (1520-1584)：パリ生れの薬剤師。アンリ3世や彼の王妃、その他の大貴族の援助を受け、フォーブール・サン・マルセソーに、「キリスト教善意の家」Maison de la charité chrétienne を開設（1578）、同時に薬草園や薬局、孤児たちを薬剤師に育成する学校、貧乏人のための無料の施療院などを開設した。薬剤師になった孤児たちはこの病院で病人の看護に当たった。ウエルの歿後、この病院は負傷兵を収容する病院となり、パリにおけるアンヴァリッドの第1号施設となった。ウエルの薬剤師養成校はフランスにおける最初の薬学教育機関であり、これは後の1800年にできるパリ薬学校の先駆である。彼には『ペスト処方』*Traité de la peste*（1573）などの著書がある。

13) Assemblée nationale constituante：正式名称は、立憲国民議会。1789年5月5日、ヴェルサイユで開催された三部会は、貴族部会270名、僧職部会291名、第三部会584名の議員で開催される予定だった。しかし貴族部会、僧職部会の議員は、第三部会の議員と同席する事を拒否、議事は紛糾したまま進展しなかった。第三部会は自らを「国民議会」Assemblée national と称し（6.17.）、国王の解散命令を拒否、議場を閉め出されたので、近くの掌球場を臨時の会場とし、憲法制定まで戦う決意を宣言（「掌球場の誓」）、「立憲国民議会」と改称したのである（6.20.）。やがて国王の命令により、貴族、僧職両部会の議員もこの第三部会の「国民立憲議会」に合流、この名称が正式のものとして公認された（7.9.）。従ってこれ以後は「立憲議会」の名称が正しい。立憲議会は

「人権宣言」の起草を始め、貴族や僧侶の封建的特権の廃止、信仰や出版、結社の自由、教会財産の没収、国王の特赦権の廃止、拷問の廃止、ギロチンの採用、同業組合の廃止、フランス全土を 83 の県に分割することなど、近代的な諸改革を行い、1791 年の憲法を準備した。

14) Samuel-Jean Pozzi (1846-1918) : フランス南西部ドルドーニュ県ベルジュラックの生れの外科医。研修医として勤務のかたわら、ドクター論文を提出 (1871)、次に教授資格論文により (1875)、正式に外科医に任命された (1877)。比較解剖学と人類学に関心を持ったが、人類学への趣好は、彼の師であり友人でもあったブロカ博士の影響だった。彼は多くの論文を発表し、ダーウィンの『人と動物における感情表現』*Expression of emotions in man and animal* などを翻訳している。フランスにおける外科学の近代化特に婦人科医学の進歩に多大の貢献をなした。また師を称える『ブロカ頌』*Eloge de Broca* も書いている。

15) Flandre : ベルギーと国境を接する北フランスの呼称で、黒海に沿ったフランスとベルギーのエスコール河口とアルトワ地方のパ・ド・カレ県との間の平野部を指す。カレ、ダンケルク、オステンドなどの港湾都市がある。

16) *Invitation au voyage* : ボードレルの『悪の華』収載第 53 の「旅へのいざない」を指すものと思われる。この作品は「両世界評論」誌の 1855 年 6 月 1 日号に発表された。アンリ・デュバルクの有名な作曲があり、日本でも愛唱されている。

17) Georges Jules Victor Clairin (1843-1920) : パリ生れの画家パリの芸術学校で学び、1864 年のサロンに初出品し、ある程度の注目をひいた。親友のアンリ・ルニョールとスペイン、モロッコを旅行、2 作品をサロンに出品したが、そのうちの一作「グラナダにおけるアバンセラージの虐殺」*Massacre des Avencerages à Grenade* は、ルアン美術館に展示されている。1874 年には師のビルが病気で完成できなかったオペラ座の階段の装飾を完成させている。この出来映えに感心したガルニエ（オペラ座の設計者）は、彼に他のホールの天井画やビュッフエの壁板の装飾を依頼している。1878 年にはガルニエ設計のモンテ・カルロの劇場の装飾、シェルブール劇場の装飾を行っている。またサラ・ベルナルドやマスネ夫人の肖像も描いている。1888 年にはレジオン・ドヌール勲章を授与された。

18) Guillaume Dubufe (1853-1909) : 父 Edouard (1820-1883) も画家で、彼は先ず父に就いて学んだ。1877 年のデビュー作「アドニス之死」*la Mort d'Adonis* と「習作」

*Etude* は、優雅なフォルムと繊細な色彩で注目された。この作品は三等賞を獲得した。1878年のサロンに出品した「4月」*Avril* と「聖セシル」*Sainte Cécile* は若い女性のヌードを描いたもので、一部からの非難はあったものの、やはり姿態の優美さと新鮮な色彩により、二等賞を授与され、これ以後、彼は無審査の会員になった。彼はまた肖像画に優れ、ミュッセ、ユゴー、ラマルチーヌの三大ロマン派の詩人の肖像を描いている。またコメディエール・フランセーズの天井画も描いている（1885年完成）。

19) Kalmux 又は Kalmouks：シベリヤ南部に住んでいたモンゴル民族の一部族。1334年頃に建国したが、ジンギスカンのため一時亡国となったが、17世紀頃に独立を回復した。しかし最終的に中国に併合された（1935）。人種的に近い部族は、現在ではドン河とヴォルガ河の中間地域に住んでいる。

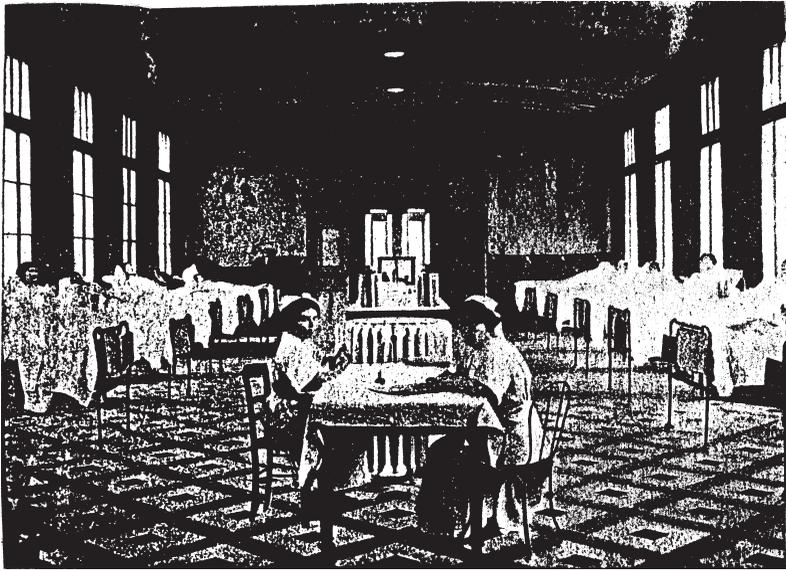
20) Thomas Gainsborough（1727-1788）：イギリスの画家、デッサン、風景画家。サフォーク州の出身。ロンドンに上京、フランシス・フェイマン（1708-1776）に学んだが、やがてファン・ダイク、ヴァトーらの影響を受け、独自の画風を確立していった。風景画、肖像画に優れ、サー・ジョシア・レノルズ（1723-1792）と共に、イギリス絵画の伝統を築いたと評される。代表作は「青衣の少年」*Blue Boy*（1779）、「シェリダン夫人」*Mrs Sheridan*（1785）など。

彼は罎の広いゆったりとした帽子を愛用していた。



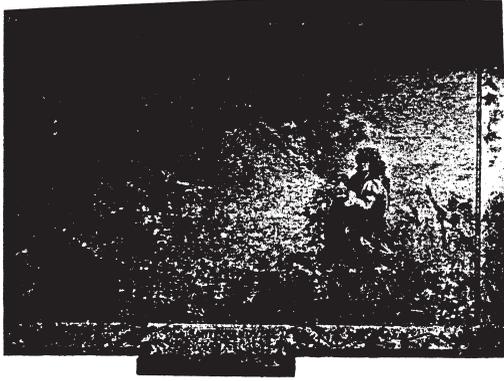
UN PAVILLON DE L'HÔPITAL BROCA.  
Richard et Bourdon, phot.

(図版 A) ブロカ病院の病棟



UNE SALLE DE SERVICE A L'HÔPITAL BROCA.  
Richard et Bourdon, phot.

(図版 B) ブロカ病院のサービス・ホール



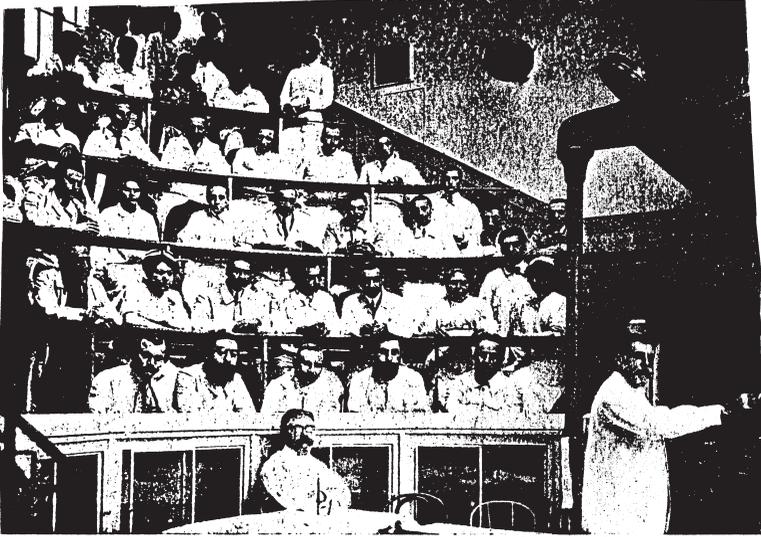
UN PANNEAU DÉCORATIF DE GEORGES CLAIRIN A L'HÔPITAL BROCA.

(図版 C) 病院の装飾壁画



UN LABORATOIRE.

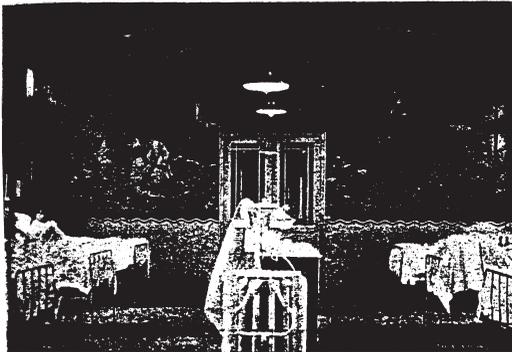
(図版 D) 実験室



LE COURS DE M. LE PROFESSEUR POZZI.

Richard et Bourdon, lith.

(図版 E) ポッジ教授の講義



UNE SALLE DE MALADES.

(図版 F) 病室

(追 記)

- (1) 本稿は、Georges Cain 著 *Le long des Rues* (Flammarion 社, 1912 年刊) から、訳者の興味をそそった章を訳したものである。原題の意味は、「通りに沿って」、であるが、パリの歴史に言及している箇所が多いので、「パリ歴史散策」と意識してみた。テキストをよりよく鑑賞する一助として、人名、地名などの解説として、訳注を補足してある。お役に立てば幸甚である。
- (2) 翻訳にあたり、主として利用させていただいた文献のみ記し、謝意を表したい。
- イ) 「十九世紀ラルース大辞典」
  - ロ) 「岩波西洋人名辞典」
  - ハ) 「世界美術辞典」(新潮社, 昭和 60 年刊)
  - ニ) 「フランス文学辞典」(白水社, 1974 年刊)
  - ホ) 北島広敏著「パリの橋」(グラフ社, 昭和 59 年刊)
  - ヘ) J-P.Clébert : *Les Hautes lieux de la littérature française*, (Bordas 社, 1992 年刊)
  - ト) J.Hillariet : *Connaissance de vieux Paris*. (Princesse 社, 1954 年刊)
  - チ) J.Hillariet : *Dictionnaire historique des rues de Paris* (Minuit 社, 1985 年刊, 2 巻)
  - リ) Félix et Louis Lagare : *Dictionnaire administratif et historique des rues et monuments de Paris* (Maisonneuve et Larose 社, 1994 年新刊)
  - ス) 村松嘉津著「巴里文学散歩」(白水社, 1958 年刊, 2 巻)
  - ル) 宇田英男著「誰がパリをつくったか」(朝日新聞社, 1994 年刊)
  - オ) ミシュラン社編「パリ」(実業之日本社, 1991 年刊)
  - ワ) 河盛好蔵著「パリ物語」(角川書店, 昭和 34 年刊)
  - カ) 新倉俊一他共著「事典・現代のフランス」(大修館書店, 1977 年刊)
- (3) 前号に校正ミスがありました。下線のように訂正して下さい。
- p. 11. 下から 15 行目 ユゴ